

社会福祉施設訪問法話

「死ぬのではありません、生まれるのです、阿弥陀仏のお浄土に」

はじめに

ひさかたぶりに社会福祉施設訪問布教法話に赴きました。

台風がそれて昨日までとは打って変わった晴天に恵まれたので、予定を変更して自家用車で出かけたのです。琵琶湖大橋を渡り、国道一号線を超えて片道二時間の道行きです。目的地が近づいた頃、折角、用意していた地図や教務所から戴いていた案内状を置き忘れて来たことに気づきました。

どんなに気を配っているように見えても、何か一つ足りないのが私の常日頃です。確かに今娑婆にいる証拠です。

幸い目的地の市駅を過ぎた頃、いよいよ複雑な田舎道の道行が怪しくなったので市庁舎に飛び込んで道順をお訊ねしました。

「今日は 施設にお話に行きたいのですが道順をお教え下さい」と、

すると職員さんが親切に手をとるように施設までの道行を教えて下さったのです。

「前の道を左に向って中学校も通り越してまっすぐに行って戴きますとやがて三叉路に往きあたりますので、右へ折れて少し行って戴くとまた三叉路に往きあたります、今度は左に折れてしばらく行くとまもなく施設に到着します。」

お礼を行って市庁舎を出て車を走らせると、最初の三叉路です。面白いことに、職員さんが「右へ行くんですよ」とおっしゃったのに、なぜか左の方に往くのがよいような錯覚に執られるからふしぎです。こうしたときは、自分の錯覚はさておいてご案内の通りに進むのがよいのだと、自分で自分に言い聞かせるようにして参りますと次の三叉路です。そこもクリアして参りますと、やがて間違いなく施設へ導いて戴いたのです。知らない道行きは、わがはからいとらわれてはなりません。まるで、如来様の仰せに従う信心が大切だといい聞かされるような思いでありました。

「死ぬのではありません、生まれるのです、阿弥陀仏のお浄土に」は、そのときのお話です。

あの子はたあれ

さて、施設のお内佛様の前でお勤めが終ったあと、私は決して「あの子はたあれ」の歌を皆さんとご一緒に歌うことにしています。

その場にご参加のおばあちゃん、おじいちゃんのお名前を頂戴して歌うのです。今回は開始の合図よりも先にいつのまにか皆さんの歌声が施設にこだましていました。

お名前を歌い込んだおばあちゃん方が思わずあどけない表情をお見せになります。

両親を思い出すのはお念仏と一緒にです

近頃は、本題を切りだすのが容易になりました。この四年間の出来事である私自身の両親との別れのお話から切り出すことができるからです。両親のお蔭です。

「私の両親は元気だったので、ひょっとすると死ぬことがないのでは」と思っていました。でも、とうとうそのときがやってきました。

今では、両親を思い起こすとき、必ずお念仏と共に思い起こすのです。両親は、死んだのではなく、阿弥陀如来のお浄土に迎え取られたからです。両親を送ってからというもの、私の上には直接、色もなく形もないおさとの世界が広がるばかりです。

これからは私自身にいよいよいつそのときがやってきても全く不思議ではありません。ですので、親鸞聖人のお聖教(しょうぎょう)をできるだけ多くひもといて、阿弥陀如来の他力の念仏のお救いのお話をできるかぎり正確に頂戴することに努めている次第であります。

死ぬのではありません、生まれるのです、阿弥陀如来のお浄土に

この世に生きる私達には、例外なく、そのときがやって参ります。

でもみなさん、ご安心下さい。「私達は死ぬのではありません、生まれるのです、阿弥陀仏のお浄土に」今日はご一緒にこのお話に耳を傾けて参りましょう

その昔、まだお釈迦様がご在世の頃の出来事です。王舎城に韋提希(いだいけ)夫人というお妃(きさき)がいらっしゃいました。

わが子阿闍世(あじゃせ)太子の為に、城の奥座敷に幽閉されて苦しみに苛(さいな)まれ、遙かに耆闍崛山(ぎしゃくっせん)の山上にましますお釈迦様にお弟子様をお遣(つか)わし下さいと願ったのです。山上で万二千のお弟子様方に法華経のご講義をなさっていらしたお釈迦様は、これはただごとではないと御察しになり、山上でのご講義を中断されて、瞬時にして韋提希の前にお姿を現されたのです。

韋提希はお釈迦様に愚かな凡夫の姿をさらけ出して「私はつくづくこの世がいやになりました。私に憂いや悩みのない清らかな仏様のお浄土についてお説き下さいませ。」とお願いしたのです。

そこで、お釈迦様が神通力によって数々の仏様方のお浄土を韋提希にお見せになると、韋提希は「私は阿弥陀如来のお浄土に生まれとうございます。」とお願いしました。

そこで、お釈迦様は、韋提希の願いの通りに、十三の精神統一の定善観法(かんぼう)をお説きになりつつ、「汝の苦悩を除く方法」と説き示そうと仰せになります(Ref『観経』第七華

坐観(けざかん)。

お釈迦様のお言葉が終わるや否や、お言葉の代りに、韋提希のまのあたりに、阿弥陀如来が直接お姿を空中にお現わしになります。お釈迦様の「汝の苦悩を除く方法を説き示そう」というお言葉に示し合わせたかのように「苦悩を除く方法は、わたしだよ」と阿弥陀如来がお姿をお現わしになったのです。これを「二尊一教(にそんいっきょう)」と申します。

思えば、煩悩に責めさいなまれる愚かな凡夫でありながら韋提希は、後の世の迷いの凡夫である私達の為に、お釈迦様と阿弥陀如来の示し合わせた大悲のお心から阿弥陀如来のお姿に直々に遇わせて戴いたのだといえます。

阿弥陀如来のお立ち姿は、お釈迦様が私達がお救いに与る南無阿弥陀仏の名号のお救いの言われそのものだということで、これを「聞見一致(もんけんいち)」と称するのであります。

南無阿弥陀仏は阿弥陀如来のお名号です。

そのお名号に遇わせて戴くにはどのようにすればよいのでしょうか。

折角ですから、皆様両手を合わせて合掌のお姿をお取り下さいませ。

ご一緒にお念仏を何度か頂戴致しましょう。

「南無阿弥陀仏(なんまんだぶ)・・・」。

お一人のおばあちゃんに向ってお訊ねします。

「ただ今、『南無阿弥陀仏』とお称えしました。すると聞こえて下さったものがある筈です。なんと聞こえてくださったでしょう。

「なんまんだぶつ」と聞こえて下さいました。

「それは素晴らしい。『南無阿弥陀仏』と称えれば、『南無阿弥陀仏』と聞こえて下さったのです。聞こえて下さった『南無阿弥陀仏』は、私の声ではなく、阿弥陀如来直々(じきじき)のお喚び声だったのです。

「われ、よく汝を守らん、ワレヲタノメ、ワレニマカセヨ」のお喚び声だったのです。

「私達にはやがてそのときがやって参ります。

けれども死ぬのではありません。阿弥陀如来のお浄土に迎え取られるのです。

如来様のお喚(よ)び声におまかせすることによって」合掌

正覚寺仏教壮年会例会	毎月第一日曜日	午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会	毎月十六日	午後七時半より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)		
〒520-0501 大津市北小松四五二番地 電&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥		
http://syohgakuji.web.fc2.com/ E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp		